毛・周以後 十全大会の"謎"にみるその光と影

周恩来の失脚もあり得る!? 一般に見落とされている王洪文報告の一節から、今後の要人たちの動向と政策を展望する——

中嶋嶺雄
（東京外語大助教授）

矛盾だらけの十全大会報告

ここ数カ月、内外の注視が集まっていたにもかかわらず、去る八月二十四日から二十八日まで北京で極秘裏に開かれたことが事後公表された中国共産党十全大会は、あまりにも多くのナゾを秘めた大会であった。今回の党大会が形式的にも異例の大会だったことについてはすでに新聞解説も指摘していたが、その内容を検討すればするほど、今日の中国の政治の方向を明確に輪郭づけがたい、さまざまな要因が濃縮されたままの党大会であったように思われる。

周恩来の政治報告を詳細に検討してみても一定の路線が明白に浮かびあがっているものとは思われず、林彪を全面否定しながら林彪大会の観さえあった九全大会の路線を引きつぐと主張していることなど、随所に論理の矛盾や自己撞着が目立つし、その流星的昇進によって世界を驚かせた王洪文の党規約改正報告のなかにも、後述するように、きわめて深刻なナゾが秘められている。

そうした不可解さのなかで明白なことは、今次党大会が対内的には林彪批判の、対外的には対ソ非難の一大儀式の観を呈したことであり、同時に、九全大会路線から林彪色を一掃して、林彪事件以来の最高指導部の人的な空白を一挙に埋めようとしたことであった。これらの諸点は明白であったにしても、すでに過去の問題ないしは既定の問題であるはずの林彪批判や対ソ非難をなぜこうも激しく展開しなければならないのか、今日、中国をとりまく国際環境の大きな変化のなかで歴史的な転換期にあるはずの中国が、その将来をどの方向に沿って進んでゆくのかほとんど不分明であるのはなぜか、といった疑念は、林彪事件の真相として教えこまれている内容をそのまま信ずべきものかどうかといった懐疑とともに、おそらく中国の民衆のあいだにも潜在しているにちがいない。

要するに、今日の中国は政治的にきわめて流動的かつ不確定だと見ざるを得ないのであって、そのような政治の流動と不確定性を暫定的に処理し、凍結したのが今次大会であったことはたしかだろう。従って、問題の真の核心は林彪批判や対ソ非難以外のところにあるのであり、そのような核心的な問題を決着しかねているがゆえに、林彪批判、対ソ非難

の壮烈な一大キャンペーンを展開することによって大会を儀式化したのではなかろうか。

では、その核心的な問題とはなにか。第一には、しばしば語られているところの穏健派としての周恩来グループと急進派としての江青グループの対立説や今後の中国を国際化時代にふさわしい「開かれた中国」として建設してゆくのか、依然として革命国家としての「閉ざされた中国」として維持してゆくのか、「紅」でゆくのか「専」でゆくのか等々の問題がすぐ思い浮かぶであろう。周恩来政治報告が「プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命」、「上部構造の領域での階級闘争」、「二つの路線の階級闘争」といった観点を強調し、周恩来らしからぬ〝革命主義〟のポーズをとらざるを得ないものになっていることも、このような問題の所在を示している。

とはいえ、このような論理面での〝革命主義〟の強調にもかかわらず、九全大会以後の四年間、実態面での中国が内政的には脱文革の道を大きく歩みはじめ、対外的には米中接近以来の「国家外交」をきわめて積極的に展開して、従来の「革命外交」どころか、最近の日中関係に見られるように、わが国政財界との接近・癒着さえ急速に進んでいることは事実であり、このような方向を全般的に周恩来が主導していることについてもほぼ疑う余地はない。だとすれば、実態面で脱文革、脱イデオロギー、「毛沢東体制下の非毛沢東化」が進んでいるがゆえに、こうした事実の論理的矛盾をおおうためにこそ、周恩来はいまあえて〝革命主義〟を強調せざるを得ないのだ、との解釈も成り立つ。

第二には、今次党大会の前後に顕著になった旧実権派幹部の大量復活の問題がある。すでに四月に復権した鄧小平をはじめ、ウランフ、譚震林といった旧実権派領袖の復活、李井泉、李葆華といった地方に強力な根をもつ旧実権派実力者の相次ぐ復活は、党内の勢力バランスのうえできわめて重大な問題であろう。今次党大会では、これらの復活幹部はいずれも中央委員としての地位にとどまり、一人として政治局には復帰していないが、旧幹部の処遇とそのランキングの調整についてもさまざまな問題があったであろうことは容易に予想できる。

しかし、以上のような諸問題だけなら、これまでにも論ぜられたし、また、当然、予測し得る問題でもある。私は、問題の核心がもっと別のところにあり、しかも予想以上に深刻かつ重大な問題が隠されているのではないかと考えている。それは、どのような問題であろうか。

王洪文（左）の十全大会報告は毛・周の微妙な関係を示唆している

王洪文は周恩来批判派？

十全大会の諸文献にあらわれた多くのナゾ

を含む文脈のなかで王洪文の党規約改正報告のなかの次の個所は、私をギクリとさせ、目を釘づけにさせた（ちなみに、わが国の新聞は、党規約改正関係ニュースの入電が朝刊原稿の締め切り間際であったためか、改正された党規約のほうは詳しく報ぜられたが、王洪文報告の内容についてはきわめて不完全なかたちでしか報ぜられなかった）。

「路線にかかわること、大局にかかわることであれば、真の共産党員は公につくす心をいだいて、免職をおそれず、党からの除名をおそれず、入獄をおそれず、殺害をおそれず、離婚をおそれず、敢然と潮流にさからわなければならない」（王洪文「党規約改正についての報告」、傍点は筆者）

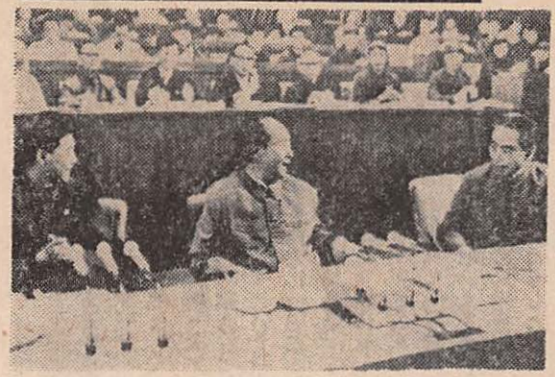
この前後の文脈は、党内にも誤った路線や観点が支配的になることがあり、それを見分ける能力がきわめて重要であるが、「権謀術数をろうする者が故意に見せかけをつくるので、われわれが見分けるのをいっそう困難にしている」ことを主張している。

王洪文の報告は、党規約から林彪条項を削除するためのものであるにもかかわらず、全体的に林彪批判、対ソ非難のトーンが周恩来報告にくらべて著しく低く、やわらかいことは誰の目にも明らかだが、それにしても右の一節はあまりにも衝撃的なものである。真の共産党員、つまり中国共産党の指導者のなかで、免職、除名、入獄、殺害、離婚をおそれず敢然と潮流にさからった者とは、ほかでもなく、林彪とその集団だといわんばかりではないか。林彪批判一色のような党大会で、しかも林彪批判の一環を担う役目の王洪文が、免職、除名、入獄、殺害をおそれず、潮流にさからうのが真の共産党員だという刺激的な言辞をなぜ、あえて用いたのであろうか。

周恩来報告が、いつものような周恩来らしいおおらかさを失った、どこか余裕のないものであり、しかも、路線闘争は「これからさきも十回、二十回、三十回と起こるであろうし、林彪のような人物があらわれ、王明、劉少奇、彭徳懐、高崗のような人物があらわれるであろう」とヒステリックにまで強調している事実と対比したとき、ナゾはさらに深まるのである。周恩来報告のこのようなトーンは、劉少奇、林彪とこれまでの党大会で政治報告をおこなったN●・2が、二度にわたって葬られてきた党内闘争史の、その関頭に経験的には彼がいよいよ立っているという立場がもたらす緊張を反映しているのかもしれないが、いずれにせよ、この王洪文発言は、もしかすると問題の複雑な側面を深くしのばせているのではなかろうか。

だとすれば、次のような仮説さえ成り立つのではなかろうか。すなわち、毛沢東をはじめ文革グループは、九全大会までの事実が示したとおり、林彪を後継者として指定することで一致し、毛沢東以後の中国を彼に託そうとした。だが、そのことにもっとも抵抗したのは周恩来であり、林彪事件は、毛・周対林の抗争ではなく、林彪の毛への謀叛でもなくして、林・周の死活の闘争ではなかったか。

こうした対立のなかで、今日公式にされているように林彪は毛沢東を暗殺しようとしたのではなく、八月二十九日の台北発AFP電が中央通信の大陸情報として伝えたように、林彪は周恩来暗殺をこそ謀ったのかもしれない。林・周の死活の闘争にかんして、毛沢東は林彪を擁護したかったのだが、文革の挫折は、脱文革をはかる周恩来勢力や旧実権派勢力の台頭・復活のなかで毛沢東の指導力と権威を実質的には失墜させており、大勢は周恩来の勝利に帰しつつあって、林彪への一抹の不信を私的に語った「毛主席が江青女史に与えた手紙」さえも不本意ながら公表せざるを



周恩来にも、かつてのNo.2、劉少奇・林彪の道をたどる可能性もないとはいえない

得ないような状況が支配的となり、やがて林彪事件によって軍を失った毛沢東は、今日、名目的な権威を持することのみを余儀なくされつつあるという仮説である。この仮説には、まだまださまざまな論証が必要であろうが、このような仮説を導入すれば、林彪事件そのものについても、その後の経過についても多くのナゾに逆証明を与えることが可能でさえある。私は、いますぐこの仮説が正しいことは主張しないが、それ程までに、先の王洪文の言葉は気になるし、この文脈からすれば、周恩来こそ最終的な毛沢東批判者であり、王洪文は、毛沢東グループが今日の党内勢力バランスにおいて送りこんだ周恩来批判者であるのかもしれない。

最後に笑う者はだれか

さて、十全大会はこれほどまでにナゾを秘めているだけに、今後の中国の政治的展開には、なお注目すべき事態が招来されるであろうが、今回の十全体制が毛沢東以後の時代への流動的かつ過渡的な移行体制で、十全体制とは要するに毛沢東以後の時代への移行をそれぞれの指導者たちがそれぞれの立場から、さまざまな思惑を秘めて形成した暫定的な集団指導体制であることは疑いない。

その性格は、周恩来、葉剣英および旧実権派幹部らに代表される穏健派と王洪文、張春橋、江青、姚文元らに代表される急進派、朱徳、董必武、康生、許世友、陳錫聯らに代表される中立派の三者の妥協的な連合体制であり、同時に康生、王洪文、張春橋、江青、姚文元らに代表される党官僚と周恩来、董必武、李先念らに代表される行政官僚、葉剣英、李徳生、許世友、陳錫聯らに代表される軍官僚との党・政・軍の三重の連合体制でもある。

こうして新しいリーダーシップはきわめて妥協的・調整的な性格の強い流動性をもったものであり、その連合のバランスが周恩来主導的に形成されていることは疑えないが、ようやくこのバランスを支えているのは、政策ないしは路線上の均衡であるよりは、今日の中国が、好むと好まざるとにかかわらず直面しなければならない二つの客観的な圧力にあるようだ。つまり、これまであまりにも老齢化していたリーダーシップの若返りの必要と中国を「開かれた中国」へいざなおうとする今日の世界の外からの圧力に耐え得るリーダーシップの凝集の必要という二つの客観的な圧力がそれである。この二つの圧力のまえに中国は、これ以上の内部抗争を休戦せざるを得ないという要請におそらく炯眼な中国指導者たちは、当面とらわれているのであろう。

この点で、毛沢東、周恩来、朱徳、董必武、葉剣英らの「老」、張春橋、李徳生、呉徳らの「壮」、王洪文、姚文元らの「青」の三結合が全党的な「老・壮・青」三結合に見合ったかたちで形成されたことの意味は大きく、これは中国の将来への光明である。そして、毛沢

東という超人的な指導者のカリスマ的権威を相対化することによって、毛沢東以後へ順調に移行しようとする試みが表面的には開始されはじめたことは大いに注目すべきである。

たとえば、十全大会でも依然として「わが党の偉大な指導者・毛沢東同志」という表現は用いられているにせよ、従来のように、「われわれの偉大な毛主席」という表現はなくなり、周恩来報告もたんに「毛主席万歳、万々歳」で終わっているのである。

周恩来報告でも、重要な文脈にはしばしば毛沢東の言葉がそのまま引用されており、改正された党規約総綱もすべて「毛沢東語録」をつぎはぎしたものだとはいえるが、しかし従来のように毛沢東個人の名称を引くことは慎重にさけられている。こうしたプロセスは、毛沢東の権威をやがて実質的にも相対化するための布石だともみられよう。しかし、すでに見たところからも明らかなように、毛沢東なきあとの毛沢東評価がどのようなものになるのかは、ひとえに今後の党内政治そのものにかかっているといわねばなるまい。

今回の林彪批判、陳伯達批判の激しさは、八月三十日の「ニューヨーク・タイムス」紙社説も述べているように、スターリン時代の敵対者にたいする誹謗を彷彿とさせるだけに林彪にせよ、陳伯達にせよ、あるいは劉少奇にせよ、こうした「反逆者」を党中枢に据えながら、毛沢東のみは絶対的に正しいとする今日の中国政治そのものの責任が、毛の死後糾弾されるかもしれないし、「スターリン批判」と非スターリン化に類似したプロセスが歴史の教訓として、また必然として生ずるのかもしれないが、しかし、こうした未来については、中国のリーダーたちにも、その予測はまだ不可能であろう。かつて「スターリン批判」を支えた社会的・歴史的基盤がスターリン体制の桎梏のなかで目覚めつつあったインテリやテクノクラート、ビューロクラートの成長にあった事実からすれば、ソ連の一九五六年時点の転換期を約二十年おくれてたどる中国に、その可能性を否定することはできない。

ただここで決定的に異なる点は、ソ連において「スターリン批判」がまったく予想し得なかった最初の歴史的経験であったのにたいし、中国ではすでに毛沢東体制下で毛沢東批判がこれまでにもいくたびか潜在し、あるいはつみとられてきたということであり、それゆえに、「スターリン批判」型のドラスチックな「毛沢東批判」が将来可能だとしても、そのことのもたらす重大な得失を未来の後継者たちは十分に計量してから行動し得るということである。だとすれば、短期的にはやはり周恩来がそのカギを握るのであろうし、毛と周との肉体的な生命の消長がこの場合大きな要素になり得よう。

毛沢東なきあと、すべてを知りつくしているはずの周恩来が一貫した「潜在的な毛沢東批判者」としてのその面目を発揮し、みずから「最後に笑う者」になり得るかどうかも重大な問題である。そのことのほうが中国の将来を未来に向かってよりたくましく解放し得ると考えるなら周恩来だけが当面、それをなし得る人物であろうが、もう一つの不吉な可能性は、周恩来もまた、これまでのNO・2のたどったそのジンクスどおりの運命に出会うかもしれないということである。

この後者の可能性は、もし起こるとすればかなり短い将来においてであろうが、そのような事態は毛沢東の死以上の不幸を中国にもたらすであろうだけに、今日の中国が是非とも避けねばならないところであり、同時にまた、中国をめぐる今日の国際環境がこのような可能性の余地をますますせばめていることもたしかである。